「底が突き抜けた」時代の歩き方 257

「在日」はどのような居場所か

『文藝』（８６・秋季号）の特集「さまざまな〈在日〉」で、評論家の四方田犬彦が、《日本という場所に留まりながらも、母国なり故国といった観念を拒否し続け、さながら異邦人であるかのように思考を始めることは、いかにして可能か》と問うている。この問いは、《それは何をもたらすことになるのか。いや、もとより可能なことなのか》という問いへと更に続く。四方田氏によれば、《第三帝国の台頭を前に、故国を去り、長い亡命生活を選んだトーマス・マン》は、《わたしがいるかぎり、そこにドイツが存在している》という確信に支えられていた。ヒトラーが君臨するドイツ、自分のいないドイツはドイツではないという確信であった。《来たるべき民主主義の勝利を説き、ヒトラーを人類の敵と断言した『魔の山』の作家は、自分がニーチェとワグナーを産んだドイツ文化の正当な嫡子であることをけっして疑おうとしなかった。》

もちろん、マンはただ単に《わたしがいるかぎり》、そこに存在している筈のドイツに亀裂が入っていないということを確信しているにすぎなかった。《ノーベル賞作家であるマンは名声を失うことなく亡命に成功したため、強制収容所の悲劇を直接目のあたりにすることがな》いという幸福に恵まれていただけのことなのだ。もし強制収容所の苛酷な現実に直面したもう一人のマンが存在していたなら、ユダヤ民族の迫害の物語のなかで受難の主人公としてではなく、《ドイツ文化への深い共感と同一化を旨としてきたユダヤ人》として、《彼の身体を文化的に構成してきた（と少なくとも信じられた）さまざまな要素があるとき彼を排除し、消滅に追いこもう》とする《このパラドクサルな悲劇》にどのように耐えることができただろうか。マンは彼の知らないドイツに直面せずに済んだだけのことであったのだ。

『魔の山』の作家ではなく、もう一人の作家が呻吟しながら直面していた強制収容所の現実とは、本当はガス室の強制収容所ではなく、自分を育み養ってきた筈のその国の文化的なさまざまな諸要素が、自分の存在を抑圧し、抹殺しようとする《パラドクサルな悲劇》としての強制収容所であったことはいうまでもない。しかし、この《パラドクサルな悲劇》に直接見舞われたのはユダヤ人であったとしても、その悲劇から無縁なようにみえた当のドイツ人もまた、自らの足元に食い込んでいる亀裂を鋭く感受せずにはいられなかった。つまり、ユダヤ人と同様に、ドイツ人もまた、ドイツという場所で生きながらも、祖国といった《観念を拒否し続け、さながら異邦人であるかのように思考を始めること》を迫られつづけなくてはならなかった。自国文化への一体化が民族差別を生みだすという自覚を持たざるをえなくなったのである。

したがって、日本人もまた、日本文化に異邦人のように対せざるをえなくなるというところで、四方田氏は次のような疑問を発する。
《わたしには以前から、在日韓国人からはどうして純文学作家しか登場せず、在日中国人からは推理小説をはじめとする大衆小説家が輩出しているかが疑問だった。竹田青嗣の『〈在日〉という根拠』を読んで、その理由が自分なりに納得できるような気がした。在日韓国人は日本国内での差別、南北朝鮮の分断、世代間の軋轢といった多くの分割線を、一人一人が個人の身のうえに生じた事件として引き受けなければいけない政治的状況に置かれている。お前は何者なのかという外部からの問いは、自分は何者なのかという内部の問いを誘発し、自己同一性の探求およびその困難こそがある特権のもとに文学的主題として選ばれることになる。竹田は、抑圧された民族意識と疎外感を根拠として書き始めた李恢成や金鶴泳といった作家に白樺派との類推を見ている。両者は出自のまったき違いを別にするなら、ともに教養小説的構造をもち、きわめて多くのものを共有しているのだ。周囲の多数派とは隔絶された環境をめぐる矜持と劣等感、すなわち両価的な感情。父親に代表される権威への反抗。彷徨と和解。疎外が内面をうみ、内面が文学を正統的に根拠づける。徴(しるし)付きの存在として生を受けることは、文学的には選ばれた環境なのだ。こうした論旨を敷衍してゆくと、皮肉なことに、在日韓国人文学こそが日本文学の正統性の継承者であり、純文学の古典的な範であるという結論になる。
在日中国人社会からけっして純文学作家が登場しない理由は、彼らが一見在日韓国人に似て現実には民族的少数派でありながら、理念のうちではもとよりある確実な普遍に到達しているためではないか、とわたしは考えている。邱永漢が金儲けの話を書き、陳舜臣が神戸を舞台としたミステリを書くとき、彼らは日本語の内部で書くという行為をめぐってきわめて安定した了解を前提としているのであり、そこには在日韓国人作家に見受けられるような実存的な危機は横たわっていないように思われる。在日韓国人にとって文学とはいまだに到達されていない普遍へ一歩でも接近するための苦業であり、より正確にいうならば接近の不可避性と不可能性ではないだろうか。》
四方田氏の以上の言説は、別の角度から照射することができると思われる。在日韓国人作家が在日中国人作家の邱永漢のような「金儲けの話」を書こうとしないのは、在日韓国人の大半が関心を注いでいる「金儲けの話」に背を向けたところに、《抑圧された民族意識と疎外感を根拠と》する文学的主題を設定したかったからではなかったか。《抑圧された民族意識と疎外感》をバネとし、打ち消すのに一般の在日韓国人が「金儲けの話」に向かっていく潮流が形成されつつあったなら、表層の「金儲けの話」にけっしてからめとられることなく、根源の《抑圧された民族意識と疎外感》を見つめ直そうとする少数の人々が政治や文学の領域から輩出されるのは必然であった。
同じ『文藝』の特集の中で文芸評論家の川村湊は韓国での「在日神話」に触れている。
《「あいつらはみんな『在日(ジェイル)』さ。ああやって金を持って来て、紙くずみたいに使って、自分の国のためになってるように、思ってるんだ」

韓国のカジノを見物に行った時、案内役の韓国人の知り合いがそう言った。「在日（ジェイル）」という言葉が、こんなニュアンスで使われるのかと、ちょっとびっくりしたほど、冷たい言い方だった。高額紙幣を、無造作に何十枚もテーブルの上にならべ、それをチップに替えてゲームを行うのだ。またたく間に、韓国人の普通の勤め人なら、数か月分の給料以上の金額が、右から左へ、左から右へと流れてゆく。ギャンブラーたちは、表情をほとんど変えずチップが残り少なくなると、おもむろに懐から紙幣の束を取り出す……。「在日」の神話というのがある。朝鮮半島で喰い詰めて、裸同然で日本へ行かなければならなかった「鎌がそばにあっても、キオッ（ハングルでＫの音）の字をも知らない」（文盲の譬え）ような連中が、パチンコ屋や食い物屋のような商売をして、金をつくり、それを母国で見せびらかさんばかりに使うというのだ。彼らは本国では喰いつめ者だった。だから、金が出来て母国に帰ってきたら、昔の恨みをはらすかのように、使いまくるというのだ。

こうした韓国での「在日神話」は、日本での、「在日」の人間は商売がうまい、金に汚い、金儲けが彼らの唯一の哲学だ、といった俗説とちょうど相補的なものといえるだろう。「在日」の問題は、政治的な問題であるより、しばしば経済的な問題として現れてくる。それは、世界の各地でユダヤ人問題が、少数民族の差別や、民族的アイデンティティーではなく、金銭、金の支配の問題として語られることと、通底したものをもっているだろう。》

この「在日」神話については、宮崎学との対談（『論座』９８．８）で崔洋一が、「韓国では昔から在日に対するステレオタイプな見方があります。在日は、植民地時代に日本に渡り、差別や貧困にあえいだ。でもやがて力強く日本に定着し、みんな金持ちになった。つまり双六のような、あがりの構図」としてみており、「彼らの驚きは『人の不幸がこんなにおもしろいものとは知らなかった』という、非常に素直な言葉として表れた。それを聞いて僕も愉快でした。（笑い）」と語っていることからも読み取れる。さて、ここでも邱永漢の「金儲けの話」が取り上げられているが、それによれば、邱永漢の小説の主人公に、「もう私には国家もない。民族もない。私は永遠に地球をさまようユダヤ人になるのだ」（『濁永渓』）と考えさせているように、邱永漢は〝亡命者〟としての立場を選択したとみられている。だが台湾と同じ日本の植民地であっても、朝鮮半島の出身である「在日」朝鮮人には、労働者として強制連行されたり、生活基盤である土地を奪われたり、さまざまな理由で祖国を離れざるをえなかったそこからは、どうしても「〝亡命〟の思想」が生みだされる余地はなく、《むしろ「国家」「民族」に対しての帰属意識を強調する場合が多》くなってくる。戦後、朝鮮半島からアメリカを中心に英語圏内に１５０万人ぐらいの韓国人が流れており、たとえばアメリカ・カナダ組であれば、渡ったからには自分たちが市民権や永住権、国籍をとって韓国系アメリカ人になることは当たり前のこととして受けとめているのは、彼らの移住には自由意志が介在しているからであろう。

川村氏によれば、日本生まれ、日本育ちの〝在日二世〟である陳舜臣は、国家からも民族からも切り離されていない「在日」の中国人知識人として、《一介のミステリー作家から、いわば啓蒙的な「民族文化」「民族歴史」の日本向けの紹介者という役割に転移することが可能だった》。邱永漢の「マネービル」が表象する問題について、川村氏はこう書く。

《「国家」や「民族」を信じない人間でも、「金」だけは信じられる。（むしろ、「金」しか信じられない）のであり、多くの現実の事例のように、しばしば人は、「金」のために、「国家」や「民族」を裏切るのだ（…）。だから、そうした存在は、「国家」の内部の日本人、韓国人、中国人といった、ナショナリズムに閉ざされたほとんどの「国家」を形成する人々から、無視され、侮蔑されることによって、「在日」問題の系列から、意識的に見過ごされていたといっていいのである。

文学者が「言葉」という、人と人とを繋ぎ合わせ、人々の間をめまぐるしく流通し、消費されるものを媒体としていることは、また〝ホモ・エコノミクス〟としての人間が、「金（あるいは商品）」を媒介として「商行為」（交換関係）を結んでいることと、パラレルなものということができるだろう。この時、「金」と「言葉」とは、きわめて似通ったものとして人間社会において流通し、交換され、人と人との意志や欲望を媒介するのである。だが、「言葉」がつねに、「民族語」というイデオロギーへの傾きを持ち、「国語」として国家、民族に閉ざされてゆくのに対し、「金＝商品」はそうした国境をやすやすと越えて、〝無政府〟的な相場や市場へと、人々を連れだすのだ。〝亡命者〟が「言葉」ではなく、「金」を選ぶことは、だからあまりにも当然なことなのだ。》

しかし、〝亡命者〟の位置においてこそ、「金」ではなく、「言葉」が選ばれなくてはならないという課題が待たれていることも確かではないのか。「言葉」はナショナリストではなく、〝亡命者〟や〝無国籍者〟を通じて自らを拡げていく可能性を待ち望んでいるのではないだろうか。《そこでもし、言葉を選ぶものがいたとしたら、それは一国の「国語」を超えて、バベルの塔以後の人類の悲願である〝世界語〟に自分の「文学」を賭ける、ということになるだろう。かくて、「亡命者」の文学は、その最初の成り立ちから、すべてのナショナリスティックな「言葉」を守ろうとする者たちと、対立せざるをえなくなるのである。》

「金」と「言葉」は「在日」にとっては、もちろん「円」と「日本語」に表象されていくが、一国の通貨としての「円」は、《その閉ざされた経済大系の中で循環し、商品と交換され、流通することによって、完き「円」を形づくる》一方で、海を越えて持ち運ばれてもいく。「円」を蓄積する「在日」の実業家にとって、《「円」がけっして彼らのアイデンティティの根拠になるものではな》いことは明白である。彼らが《「円」の中に閉ざされた富の夢の中にまどろんではいない》のは、「円」が流通し、循環するサイクルの中からはじき出される斥力をいつでも感じ取っているからであり、それ故に、「在日」はつねに流通し、循環する「円」のサイクルの外側の世界へとはみだしていかずに

はいられない。《こうした「円」の世界をめぐる動きは、同様に「日本語」という〝閉ざされた〟体系の予定調和的な円環世界の虚妄さをも打ち破る。「日本語」という言葉が、日本人、日本文化というイデオロギー的産物と直結するという一見「正しい論理」は、「在日」の詰屈として、〝歪んだ〟日本語によってただちに相対化される。そもそも、日本語がその内部で円環したものと考えることは、「円」がそれだけで一国の通貨として〝自足〟し、〝円環〟するものと考えることと等しく、空想的なものである。そうした意味では「日本語」は、「円」と同じく外在的なモノにほかならないのだ。それは〝母国語〟という湿った情感にまみれたものではなく、道具としての、経済原則や合理性にもとずいた言語でなければならないのだ。そして、その担い手としての〝亡命者〟、〝無国籍者〟たちがいて、彼ら「在日」の、この地に〝アイデンティティ〟を持たない人々の動きこそ、内閉した島国の「文学」のイデオロギーを喰い破るものとなるはずである。》

「在日」から《内閉した島国の「文学」のイデオロギーを喰い破る》〝亡命者〟、〝無国籍者〟が出現してくる願望がそこに述べられているが、もちろん、そのような〝亡命者〟、〝無国籍者〟は日本人からも現れてくる余地は皆無ではないが、ただ日本人の場合、「在日」と異なって、自らが日本人であること、日本文化を享受していることに対する意識が自覚的ではありえないという問題が逆に横たわっているといえる。「在日」の中に《内閉した島国の「文学」のイデオロギーを喰い破る》〝亡命者〟、〝無国籍者〟の言葉が孕まれているとして、その徴候はどこに見出せるだろう。まず明らかなことは、その者は「在日」のイデオロギーからも自由でなければならない。先の対談で崔洋一が、「僕は日本生まれの日本育ちの在日ですけど、日本の戦後民主主義の５０年に対する疑義というのが、どうしても払拭できないでいる。それは僕が「在日」のゆえなのか、そうではなくて「在日」とは違うもう一人の僕がいるのか、あるいはその二人はもともと一緒なのか。僕はそれを理屈ではない感覚で、どうもうさん臭いぞと思い続けてきています」と語っていることにかかわらせていうと、たぶん「在日」の彼と「在日」以外の彼との両方の感覚で、「日本の戦後民主主義の５０年に対する疑義」を深めていく方向に、〝亡命者〟、〝無国籍者〟が現れてくるような気がする。「在日」を非「在日」化していく過程が、「日本の戦後民主主義の５０年に対する疑義」を深めることによって、「在日」からも戦後日本からも解放され、自由になっていくことが、世界にむかっての〝亡命〟性、〝無国籍〟性を創出していく前提だと思われる。

２００１年１１月２４日記